

人 30年以上の消防団活動

種村清松さん
板井一五十三歳

昭和五十八年五件、五十九年四件、六十年十件、六十一年八件、黒埼町で発生した火災件数である。今年は一十一件。そのたびに消防署とともに消火にあたるのが黒埼町消防団。火災が起きやすい季節を前にして、団長の種村清松さんに登場願った。

「大昔から火を使っ
て人間は暮らしてきま
したから、大昔から火
事は起きてきたわけだ
ね。ずっと火には注意
してきたのに火事はな
くならない。どうして
なんかと思うね」と
種村さん。人類史では
百四十万年前にヒトの
祖先が火を使った跡が
発見されている。

黒埼町は大火が多い。近年では四十二戸を焼失した昭和四十六年の新町大火が記憶に新しい。黒埼町消防署ができたのはその翌年である。一つの町が一つの消防署を持つのは県下では珍しい。「消防署があっても消防団は必要ですね。例えば、自分の地域に消防団やポンプ車がないとすればやはり不安に思うのでは」。消防団の任務は消火だけではない。「予



火の見やぐらに昇る種村さん。「もう年だから」と言いながらも実に早い。消防団長の傍ら、PTA活動にも携わってきた。芸能も達者で苗の名手といわれる。「タバコ、ストーブに注意を」

防のパトロールをしたり、地震や水害、台風などの天災もある。だから、役割は大きい」と強調する。消防団は地域ごとに八分団に分かれ総勢二百五十五人。入団する

人は二十代後半から三十代が多く大半が農家や自営業の青年だ。「前は十二分団、四百六十四人にしてはいたが。暑もあるし農家でも勤めている人が多い。でも、

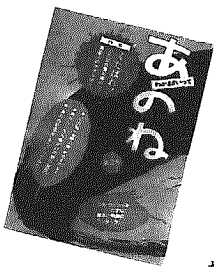
一人一人の団員は頑張っている。青年団がない現在、地域の輪になつてはいる面もある」。郡内のポンプ操法競技会で今年は優勝するなど、黒埼の消防団は優秀だ。なお、団員の手当ては年間一万六千円。種村さん自身は昭和三十年から今まで三十二年間も続けてきた。

五十八年からは団長を務めている。「なんで辞めなかつたかって。人に頼まれたからだな。おかげでここいでもサイレンの音を聞くと、火事かと思つてしまふ。新聞も交通事故より火災が目がいく。団員の信頼も厚い。種村団長が頑張っているから怠けられませんよ」と団員の声。

写真を撮りますので消防服を、と頼んだらあつという間に着替えられた。さすがは消防団長さんである。(文・五十嵐広報担当)

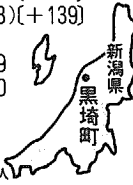
ほんの一冊

あのね(第2号)
(ごった煮工房)
400円



先月号で紹介された小林光子さんが編集する「あのね」第2号です。B5版72ページのこの雑誌には、うれしさそのまま、美しさそのまま、悔やしき悲しさ、みんなそのまま文字になっている。躍動している。

それに「あのね」のような雑誌を作る小林さんのような人が私たちの町にいるんだ、と思うとうれしくなってしまう。どんな声の人だろう、お酒もいけそうだし、フフフ…って笑うよりアッハッハと笑うんだらうな、なんだか会いたくなってきた。ちよつぱりうつむく姿がきつとかわいの人…。そんなことをイメージさせるとてもすてきな本が「あのね」です。※町内及び新潟市内の書店で発売しています。(紹介者・坂井シズ子)



(人の動き)		前年	
11月末日現在	(前月比)	同月比	同月比
人口	22,771 (+36)	[+357]	
男	11,217 (+29)	[+197]	
女	11,554 (+7)	[+160]	
世帯	5,983 (+8)	[+139]	
10月1日	未	転入	69
出生	24	転出	50
婚姻	13		
死亡	?		

●今月号の表紙
カタチのよい水たまりが、ある雨の日、出ていた。写真を撮った。水たまりがたたく人を出してしまふ砂利道が少なくなつたと思ふ。表紙には登場してもななかつたが、あるお母さんは小路や裏道、たんぼ道は子供のよい遊び場だと言っていた。草がはえて虫がいて水たまりの出来る道も国道や高速と同じくらい重要な道なのかもしれない。

●来月号の表紙
新年を迎えて 皆さんの抱負を 社会教育の特集を二月号で予定 がお聞かせください。

